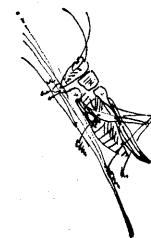


松野クララの人の間的側面 ——研究ノート——（その一）

南雲元女



はじめに

松野クララとのかわり合いは、十余年前、私が県立保母養成所長だった頃からである。保育史の文献や資料を収集するため、全国的に保育関係団体、個人または市町村、図書館などの協力を仰いだ一時期があった。その一環の資料のなかで、明治

二十年にクララが群馬県へ出向いた先覚的な事跡に、大きな共感を覚えたのである。これには外人保育者であることへの、先入観と興味が加わっていた事実も否めない。さらにつきそのあと、熊本、長崎を中心とした隠れキリストンの、保育事跡を踏査した。その際、長崎の浦上天主堂に大司教をたずね、由緒ある浦

上保育園などに親しく案内され、また付近に散在するキリストン墓地で、生前の靈名をクララと呼んだ人の墓碑名が多いのに、奇異の感をいだいた記憶がある。このような些細な事象の積みあげが、松野クララに対する私の関心と理解度を、より一層ふかめる結果になったのである。

たまたま昭和五十一年は、わが国はじめての幼稚園が誕生して以来、百年の記念すべき年である。この機会に、日本の児童教育界に大きな足跡を残したクララの業績を洗い直す一助になればと考え、一九七六年版の「日本保育学年報」に、クララの群馬行きを内容にもり込んだ「黎明期における群馬の幼稚園」を載録した。

また五月にお茶の水女子大学でひらかれた第二十九回日本保育学会では、百年記念の特別プログラム“人でつづる保育史”のなかの「松野クララの人間的側面」として、研究発表の機会を得た。

本稿はそれらを集約したものである。

これに関連した保育現場でのクララの動静については、『日本幼稚園史』⁽¹⁾などが詳述しているところである。や実際保育の方法を通じて、フレーベルの教授法をわが国に導入し、日本の幼稚園教育の確立に与えた影響は、高く評価されている。明治十四年以降は、学習院でピアノを教授し、夫君なきあとドイツに帰国した⁽²⁾とある。

クララの人間像

わが国の幼児教育界に先駆的な役割を演じたドイツ婦人、クララ・チーテルマン (Klara Ziedermann) の全生涯は謎につまられたままで、いまだに解明されない面が多く、『まぼろしの幼児教育者』とよぶのにふさわしい人物といえよう。それではここで、クララの人間像を知る数少ない文献のなかから、「日本近代教育史辞典」の松野クララの項を引用してみる。

“松野クララ（「空白」一九四一）は、東京女子師範学校附属幼稚園創設当時の主任保姆として、明治九年から十四年まで在任、當時、農商務省官吏であった松野^{トヨシキ}氏の夫人、もとはドイツ人でクララ・チーテルマンといい、幼稚園の始祖フレーベル直伝の保育法の理論と実際をもつて指導にあたり、また、保姆練習科の生徒に保育法の教授をした。とくに、恩物の使い方

前掲文のうちこれまで未詳とされていたクララの生年は、一八五三年であることが婚姻願（後出）や松野潤の生家である大野家、および長松家の家系図からも明確に立証されることになった。これによつて、フレーベルの亡くなつた一八五二年はクララの生まれる前の年であり、ややもするとクララはフレーベルから直接、保育法を受けられたかのように伝えられていることの誤りが、明瞭になつたかと思う。

クララと松野

クララと松野との最初の出会いは、松野がドイツのエーベルスワルド高等山林学校に留学中のことであったといふ。松野潤（一八四七—一九〇八）は、日本林学の鼻祖として、わが国の林学界に偉大な足跡を残した先覚者で、山口県の生ま

れ、幕末動乱期に脱藩して上京（十八歳）する際、生家の大野と姉の嫁ぎ先である長松姓を折衷して、新たに松野姓を名乗ることにしたものである。上京後、開成学校講師スイス人カドリーおよびドイツ公使館通訳ケンペルマンらについてドイツ語を習得した。明治三年、北白川宮のドイツ留学に随行して渡独後、日本留学生として林学を修め、同八年八月に帰朝した。クララの来日は、松野との間で、彼のドイツ留学中に取り交わした婚約を履行するためのものであつた。現に松野は帰朝後、満一年を経過した明治九年八月に、東京府権知事あて、左

婚姻願

先般私儀独逸国在留之砌該国人フランクエマチャーテルマン氏二女クララト申者ト予メ結婚之約仕置候處去月二日出帆之郵船ヲ以渡來不日着港之趣報知有之候間同人着ノ上ハ早速婚姻之式執行度此段至急御許可相成候様奉願上候 以上

明治九年八月九日

府下第三大区三小区

下二番町三十三番地

平民 松野 碩印

東京府権知事 楠本正隆殿

のような婚姻願⁽³⁾を提出しているのである。（東京都文書・明治九年一十年回議録・外国関涉・庶務課戸籍係）

この願書には、一八七六年（明治九年）八月二十四日付で、プロシヤ王国印をおした「フロライン・クララ・チーテルマン（二十三歳）と山林役員、松野碩との結婚に、いささかも妨碍なきを確証する」という文書と、その訳文が添付されているが、クララの出生については、一八五三年八月二日伯靈府生、と記入されている。クララが松野と結婚したのは、明治九年の八月で、松野が二十九歳、クララ二十三歳のときであった。

翌十年一女文⁽⁴⁾をもうけたのちも、東京女子師範学校附属幼稚園の主席保母として教鞭をとり、さらに明治十一年六月、東京女子師範学校保母伝習科創設後は、幼稚園監事（園長）関信三の通訳で英語による保育の理論と実際（二十恩物大意とその用法やフレーベル伝）を講じたものと考えられるが、同十二年十一月に関は世を去っているのである。そのあとは、中村正直攝理（校長）の娘たか女でも通訳を買って出たのだろうか。

明治十四年以降は学習院で……（前出）とあるのは明確でないが、十九年二月から学習院女子部の音楽教師（授業嘱託）となり、三十六年十月に退職したことは確かであろう。（女子学習院五十年史、旧職員名簿）クララが五十歳のときである。

ひるがえって、東京女子師範学校附属幼稚園の創設にさき立つて、女子師範学校の英語教師として奉職中のクララが、主席保母に迎えられたわけであるが、クララの来日と結婚が九年八月であるから、同年十一月の幼稚園開園まで、僅かに二、三ヶ月の勤務をしたに過ぎないことになる。また、前述のような理由から、明治九年から十四年まで、附属幼稚園の主席保母として在任したとする点にも疑問が残るようだ。

同時に、松野は結婚の時点では、内務省地理寮（のちの山林局）への出仕であつて、農商務省への転任は、明治十四年のことである。そこで嚴谷小波⁽⁴⁾がクララについてドイツ語を習いはじめたのは、明治十年、小波が八歳のときである。嚴谷家は、近江国水口藩の藩医の家柄であり、小波は家業の医師を継ぐに必要な基礎語学を修めるべく、父の友人で医師の長松幹を介し、クララの教えを乞うことになる。この長松幹は、松野の実姉章子の夫であるが、松野がまだ大野常松とよばれた十七、八歳ごろまでの時期に、互に手をたずさえて国事に奔走した仲といわれ、一面、松野の庇護的な役割をも演じた人のようで、松野は終生の恩人として畏敬したと伝えられる。長松家はのちに男爵を受けられている。小波は後年クララを回想して“高い

鼻、ちょっととこわいような目つきだけは、いまでも瞼に残っています。そのくせ、やさしい親切な婦人でした”と書いているが、この短い文章で表現したなかに、クララの人物像を浮きぼりにして、彼女の性格を的確に捉えているように思えるのである。

クララの群馬出向

クララの気丈な人間的側面を窺わせる適切な例題として、彼女の群馬出向をあげてみよう。

クララは明治十年の八月に四泊五日の日程で、群馬県へ出向き、前橋と高崎の二地区において、県内の指導層を対象に、幼稚園設置の必要性を訴えているのである。

群馬県文書はつぎのように記述している。

「東京女子師範学校幼稚園保母松野クララヲ 招キ桃井学校ニ於テ八月六日ヨリ同六日迄 高崎学校ニ於テ同九日ヨリ十日迄 幼稚園開誘ヲ行ヒ且幼稚園設置ノ要旨ヲ演説セシム、之ニ因テ有志ノ輩幼稚園ノ教育ニ最モ大益アルコトヲ主唱シ、或ハ出京シテ親シク之ヲ參觀シ、衆庶ヲ勧誘スルニ至レリ」

と、当時としてはきわめて画期的な行事であり、幼稚園設置の機運を醸成することを主眼目にした、一大デモンストレーション

ヨンであつたかも知れない。

とくに、クララが東京以外の土地で幼稚園設置のための運動に一役買つたことは、他に類例をみないところである。この場合のクララは、あくまで愛動的な立場であつて、それを実行に導くための、強力な権力的背景や知遇関係が、複雑に介在したこととも否み難い事実であろう。

群馬の幼稚園開誘式へのクララ出場は、ときの群馬県令、揖取⁽⁶⁾彦の要請に応えて実現したのであった。揖取は長州藩の出身で、吉田松陰の義弟にあたり、明治の元勲にも匹敵する大人物として名声を馳せた。松野にとっては同郷の先輩であるうえに、ともに藩校で学んだ間柄で、生涯したい交わりを結んだといわれている。それだけに松野は苦しい立場におかれただろうことも、想像に難くないところである。そのころ東京から群馬に至る交通機関といえば、馬車か人力車か、稀には利根の水路を利用する方法も講じられたらしいが、いずれにしても大変だったと思われる所以は、クララの体調である。

その時点で、クララは妊娠中か出産直後か、そのどちらであつたのか、長い間の疑問とされていたが、これについては、妊娠八ヶ月の身重の身体を気遣いながらの旅行であったことが、文の出生とのかかわりによつて判明したのである。そこで、ク

ララ自身が臨月に近いからだのうえに、当時の地方都市では外国婦人に接する機会もなく、一般に好奇の目をみはつたことだろ。また、クララの体調から推量しても、当然に群馬行を拒否する理由づけはあつたはず、それをあえてせず決行するに至つたのは、前述のような四畳の事情があつたにしても、彼女の信仰に基づく信念に所以するところが大きかつたと思われる。

これに報いるため、県令みずから応待にあたり、利根の清流を眼下にのぞむ明媚の高台に、茶室までしつらえた県令別邸を宿所に提供したほどである。夫君嗣がこの群馬行に同道したかどうかは、立証する資料もなく、推断はできないが、嗣と揖取は肝胆あいてらす親しい間柄で、ともに漢学の道で通じ合つたといわれることなどから、久闊の好機であつたかも知れない。群馬出向の二か月後に、クララは出産しているのである。

松野夫妻の一粒だねである文、のちのリチャード・エヌ・オーリー (Richard N. Oly) は、明治十年十月十二日に生まれ、長じてドイツクレーフェルト市のリチャード家に嫁し、二児を出産したが、同三十四年七月九日、外地 (Aiping, "台湾・台南の安平?") において二十四歳 (二十歳説もある) を一期に早世しているのである。残された二児は、クララが東京へ引き取つて養育したが、二児とも母親のあとを追うように、相ついで

死亡しているものと考えられる。しかしこれについては、一族

の家系図からも手がかりがつかめていない。

(つづく)

- (1) 倉橋惣三・新庄よしこ共著『日本幼稚園史』一九五六年、フ
レーベル館

(2) 山口県美祢郡美東町教育委員会が、筆者の乞いに応えて数次
にわたり、家系調査をされた。

- (3) 都史紀要一四「東京の幼稚園」一九六六年、東京都公文書
館（手塚竜麿氏の執筆）

本稿をまとめるにあたって、次掲の諸先生のご指導と、機
関、団体、施設などの便宜供与を仰いだことを記して感謝いた
したい。（筆者）

便宜供与

○お茶の水女子大学附属図書館。群馬県庁。群馬県林業試験場

○群馬県立図書館。国立林業試験場。東京都青山霊園管理事務
所。日本林業技術協会。山口県美東町教育委員会

(4) 巖谷小波（一八七〇—一九三三）本名秀雄・児童文学者。の
ちの貴族院議員・巖谷修の三男として東京麹町に生まれ、わ
が国の児童文学界に先駆的な役割を果たした。

(5) 群馬県保存文書「学務課考績録」一八七五—一八八年。

(6) 掣取素彦（一八二九—一九一二）山口県の生まれ、旧名小田
村伊之助初代群馬県令として在任十年、のちに元老院議員、

侍従、男爵、宮中顧問官。

（前橋保育専門学院）

（東京）岡田正章、大野淑子、吉川重喜、杉浦義人、鈴木理生
玉手三葉寿、津守真、手塚竜麿、村山貞雄、（群馬）安盛博

（千葉）久保美栄子（広島）長松太郎、四田増五郎（山口）池

田善文の諸先生。

ご指導ねがった先生

